

献呈の辞

春色とみに濃さを増し、各地で桜の便りも聞かれる季節となりました。専修大学文学部では、この三月末日をもって、人文学科歴史学専攻の青木美智男先生と環境地理学専攻の柳瀬訓先生のお二人の先生が定年を迎えられ、退職されることとなりました。

青木美智男先生は、一九三六年一〇月、福島県東白川郡棚倉町にお生れになり、福島県立東白川農業商業高等学校の卒業まで福島県でお過ごしになりました。今の先生のお姿からは思いもよりませんが、生来病弱で、高校三年の時には重い病のために一年近い療養生活を余儀なくされたと聞き及んでいます。病の癒えた一九五八年に明治大学文学部史学地理学科に入学され、徹底した古文書調査を中心とする近世の農村調査の方法を学ばれ、近世史家としての基礎を確立されました。一九六二年に東北大学大学院文学研究科国史学専攻修士課程に進まれ、同課程修了前後から、当時、日本の近世史学界を席捲していた「世直し状況論」に刺激され、百姓一揆の研究に着手。その第一人者としての評価を確立されました。一九七七年に日本福祉大学福祉学部に入職されると、文学作品を中心とした庶民文化史の研究に転じられ、次々に大著をものにされています。しかも在職一六年間に図書館長・就職部長・経済学部部長等の要職を歴任され、また知多半島総合研究所のたちあげや地元の産業史・海運

史の研究などに文字通り獅子奮迅の活躍をなさいました。

本学の文学部にお招きしたのは、そんな経済学部長在任中のことでした。福祉大にご挨拶に伺ったカリキュラム委員は「現職の学部長を引き抜くなんて専修大学もひどい大学ですね」といわれ、返答に窮したと述懐しています。本学に着任されてからは、入試問題の改革や大学院の充実、そして文部科学省私立大学学術研究重点整備事業に「フランス革命と日本・アジアの近代化」が採択されたことを受けて、専修大学社会知性開発センター歴史学研究拠点事務長、センター長をおつとめになられるなど枚挙にいとまがないほどであります。

柳瀬訓先生は一九三六年七月、新潟県小千谷にお生まれになり、小学校から小千谷高等学校まで新潟県でお過ごしになりました。一九五五年に東北大学理学部地理学に入學され、以後、今日まで地理学の研究一筋に歩んでこられました。卒業後直ちに建設省地理調査所（現在の国土地理院）に入所され、総理府技官として京都市防災研究所に向向。一九七六年には建設省計画局建設振興課から海外協力官としてサウジアラビア・ギニア・コロンビアなどに派遣され、同地域に対する日本の海外協力の指針となる報告書をものにされています。この海外派遣は、お役所時代の苦しくも楽しい思い出であったとお聞きしたことがございます。帰国後は建設省大臣官房技術参事官付補佐、国土地理院の地図情報部長・測量部長・地図管理部長・地理調査部長などの要職を歴任され、一九九〇年、国土地理院を退職されると同時に本学に就任なさいました。

先生の学問は、地形図情報の読み方や、ダム等に対する地形の適用条件、地下水学や沿岸地域の防災対策など、すぐれて今日的で実践的な学問ということが出来るように思います。本学では「環境地図学」や「野外実習」などをご担当頂ましたが、測量士補の資格取得に必要な「測量実習」に学生を連れキャンパスや多摩川べりを歩く若々しいお姿をよくお見かけいたしました。学内では決して声高に自説を主張されることはありませんでしたが、学生部委員・図書委員・教養教務委員・カリキュラム委員などをおつとめになられ、その堅実なお仕事振りには定評がございました。今、専修大学は「学生を基本に据えた大学づくり」が緊急の課題とされていますが、先生は就任以来、それを黙々として実践されて来られた方であったといえようかと思えます。

文学部は今年創立四〇周年を迎えましたが、大学をとりまく環境はいよいよ厳しさを益しつつあります。そのような時期に文学部の柱石ともいうべきお二人の先生が大学を去られることはまことに痛手であり、残念といわざるをえません。しかしこれも定めてございます。両先生がこれまで私どもに与えて下さいましたご教示、ご指導に深甚なる謝意を表しますとともに、両先生のますますのご健勝とご発展をお祈りし、献呈の言葉といたします。

二〇〇七年三月

専修大学文学部長 矢野建一